

余白の風

求道俳句誌

二〇一六年一月号
第二二八号
奇数月二〇日発行

発行と一
幸白栄
主余田
余平

俳句や短歌をつくりながら、「南無アツバ」の心を養います。

会員作品とエッセイ (◎主宰推薦句 *選評)

豊田・佐藤淡丘

止まる歩くとまるあるく冬至かな
老ひてなほ咲きたてとなる冬のばら
花八ッ手分別のきく人に会ふ
わが骨のありかを見たり寒弦月
振り落す大樹落葉の中にある

八十歳になった今も、人を赦すことが出来な
いことがまゝあります。そんなとき、どうする
か。いつも使う「土の道」を坦々と歩くことに
しています。七度の罪を七十倍ゆるせとは私の
なし得ることではありません。

しかし、キリストにあつては容易にできるこ
とが、足裏から伝わる柔らかい振動によつて
徐々に分ってくるから不思議です。そして唱え
ます。アツバ・アツバ・南無アツバ、と。

*井上洋治神父は、常々「イエスの個々の行為
ではなく、その拠つて立つ姿勢に学ひなさい」
とおっしゃっていました。「足裏」から伝わっ
てくる学びがきつとある。②今号は期せずして
「ばら」の句が多い。

死者の月なつかしき人夢に立つ
高知・赤松久子
亡き夫つまの杖を縮めて吾が名彫る

暖かき瞳にふれし冬の朝
師の「讚句」壁に飾りて南無アツバ

*④井上神父が配っていた、南無アツバのお札
と同じように、目や手で触れられるものが、わ
たしたちの祈りを助けてくれます。見えるもの
を通して見えない方に祈る。

八王子・フランシス力井上

寒い朝アツバの笑みに支えられ
ざわめきと別れ委ねる昼のミサ
約束は忘れていない聖夜の灯
山茶花は散り敷かれてる遊歩道
晩秋の草木とともに南無アツバ

*①「アツバの笑み」が感じられる信仰、⑤そ
ういうとき「草木」と一体になって思わず口を
つく「南無アツバ」。すてきな信仰生活がうか
がえます。

名古屋・片岡惇子

慈しみの扉開くや冬の薔薇
教会の扉重くし冬薔薇
枯菊の香溶け込んでいく曇天かな
初霜の下りたるところ石の心こころ
大根の土を払ひて分かち合う
木枯の中に身任せ主の心

*①②「扉」の向うの「冬の薔薇」——存在そ
のものが多くを語っています。④冬の石にも
「石の心」が見える。⑤作者の「土を払う」心
遣いがうれしい。

「都市群像」・島一木
薔薇匂ふ十字架上のキリストに
マリア像笑みたまふ薔薇咲き揃ひ

*「薔薇」の棘と花が、①イエスの「十字架」
と復活を、また②「マリア」様の哀しみと喜び
を象徴しているようです。

「日矢」六一一号・新堀邦司

E.Tの月がのぼるよ見てごらん
大聖堂暮れて涼しき灯をともし
晩禱を献ぐや堂の燭涼し

*①詞書に「スーパームーンの夜・孫娘三歳」
とあります。イエス様が祝福し、またわたした
ちの模範とした「子供」の目には、スーパ
ームーンはどのようなに映ったのでしょうか。解き
明かしが聞きたいものです。

「こみち」二六七号・竹内和子

日めくりの残り少なし神無月
亡き人をしみじみ想う吾亦紅

*①「日めくり」や日記や手帳のページが少な
くなつていく。一方、高齢化が一段と進み、残
り時間を意識する人が増えていく。十字架のイ
エス様への希望も増していく。

練馬・魚住るみ子

陽を透きて紅葉鮮やか南無アツバ池面に
映ゆる秋の興宴
老いぬれば他人ひとの言葉にのせられ易く銀
杏黄落南無アツバなむ

『風の道』
浅葱の空覆ひて花の光りつつ千筋の諸枝
重なり垂るる

*①秋の風景に溶け込んで「南無アツバ」の祈り。②人事にかかわる「南無アツバ」の祈り。いつでもどこでもわたしたちの慰めとなり、また励ましとなる。

新約聖書一章一句・平田栄一
キリストの苦の欠け満たせ大枯野

コロサイ一章より。「欠けたところを満たす」——「イエスの苦しみ」だけでは、救いに不十分だったのか。そうではなく、イエスの十字架の苦しみに、わたしたちが日々の苦しみを通して連なる、その時イエスと共に救われる、と言われているのではないでしょうか。

共に座すうみのほとりの春の山

マタイ一五章より。多くの病人が連れてこられて、「イエスの足もとに横たえたので、イエスはこれらの人々(多くは異邦人か)をいやされた。」といういやしたかは書かれていない。一人一人に触れずとも、イエスの悲愛のまなざしは、彼らをいやすに十分だったかもしれない。

平田講座要約(第39〜40回)

テキスト『心の琴線に触れるイエス』

井上神父の『キリストを運んだ男』はサンドメル著作のヒントのもとに書かれました。「あとがき」にその経緯が書いてあります。すなわち、連載(34)にも書きましたが、神父

は「数々のパウロに関する著作に接しながらも、新約聖書の全体的把握にいまひとつピンと来ていなかった。：サンドメル著作「パウロの天才」(『天才パウロ』…筆者注)をむさぼるように読みふけた私は、まさに目からうろこが落ちるに似た知的開眼を味わったのであった。新約聖書という書物の全体構造が、はじめて、わかった、という思いであった。石川氏のご好意がなければ本書が世に出ることはなかったであろう」と述べています。

何が「わかった」のか。この本には、ユダヤ教からパウロの見方が描かれており、それに衝撃を受けます。今「風」に書いているわたしの連載でも度々触れています。要は、「信仰義認論」——というよく引き合いに出されるのが『ローマの信徒への手紙』三章二節からの箇所なのですが、わたしは青野太潮氏の影響でむしろ四章三節からの箇所、とくに五節「不信心な者をも義とする」という所が重要だと思っていますが——をはじめ、いわゆる「パウロ主義」は新約聖書のすべての文書に、その賛否はともかく、大きな影響を与えているということ。そういう視点で新約全体を理解するということです。

すなわち、歴史的にはパウロ文書↓新約諸書(福音書)という順序なのですが、教会(とくにカトリック)では、福音書が第一で、パウロ文書が第二、という感じで扱われる——ミサでは第一朗読↓旧約(使徒)↓第二朗読↓手紙↓福音朗読が頂点という受け取り方です。

しかし、初期キリスト教の成立時には、パウロ主義は、ふつうに考えられているより圧倒的な影響力があったということ。原始エルサ

レム教会↓パウロ思想の流布↓福音書の成立という流れのなかで、パウロのあまりにもラディカルな信仰姿勢——律法より信仰——は、ユダヤ教の伝統↓旧約律法を引き継ぎながら成立していった教会には、目の上のたんこぶだつたわけです。だから、たとえばルカは旧約と新約を直線的につなげる救済史観のなかで、パウロ主義を弱めようとした。

つまり、新約時代にはパウロ主義を促進しようとする動きと、抑制する動きが同時に進行したのです。そのパウロは、「二つの顔」を持っていました。一つは、伝統的保守的な、バリバリのフアリサイ派としての顔です。これはある種エルサレム的といっている。疑問視されてはいますが、使徒言行録二二章三節によると、パウロはエルサレムで有名な律法学者ガマリエルからきびしい教育を受けたといえます。

今一つは、ディアスポラのヘレニストとしての顔です。これは反エルサレム的といえます。パウロはローマの市民権も持っていました。(続)

南無アツバの集い&平田講座、於：四谷ニコラバレ、日時1/23(土) 13時半、2/27(土) 同

二月近刊予告

『南無アツバ』への道(聖母文庫)

井上洋治神父の言葉に出会うⅢ——「風」連載第三部をまとめつつ、イエスのまなざしを見つめることにより悲愛へと導かれる、日本人キリスト者・求道者の生き方を模索します。

「余白の風」入会案内

どなたでも参加できます。購読のみも可。

*年六回奇数月発行 *年会費千円(送料共) *採否主宰一任*締切日偶数月二十日*申し込み先：ブログ「南無アツバを生きる」<http://yohaku5.blog.fc2.com/>から